

北浦で越冬するオオバン (*Fulica atra*) の ウイングタグ装着による渡りの記録

斉藤安行¹・菊池昶史²・嶋田峻三³・谷田川康一⁴

キーワード：オオバン、渡り、ウイングタグ、越冬、北浦

はじめに

オオバン (*Fulica atra*) は、日本全国に分布し、おもに北海道と本州中部以北の沼沢地で局地的に繁殖する（環境庁 1981）水鳥である。

オオバンは、北海道や青森県では3月から11月まで観察されるが、12月から翌年2月までは観察されなくなることが知られている（青森県 1973、小清水町教育委員会 1985、橋本 1994）。また、千葉県の新浜や手賀沼では、オオバンは一年中見られるが、冬期には個体数が増加する（新浜倶楽部 1988、斉藤 1992）。茨城県の北浦でも、冬期に個体数が増加する傾向がある。

このことから、日本の北方地域で繁殖する個体群は本州中部以南に「渡り」をするものと考えられている（日本鳥学会 1974、福田 1989、Brazil 1991）が、実際に標識による渡りの記録はない（山階鳥類研究所 1993）。

そこで、著者らは、茨城県南東部の北浦で越冬するオオバン個体に標識をほどこし、放鳥後の移動先を調査した。その結果、オオバンが長距離移動することを確認できたので報告する。

なお、本調査で環境庁鳥類標識調査用の足輪を装着し、死体が回収された2例（青森県および岩手県で回収）については、すでに山階鳥類研究所（1996）で報告されている。

調査地

調査地は、茨城県潮来町の北浦西岸水原地区

（35°58′30″N, 140°35′E）である（図1）。

北浦は、面積 34.36 km² の湖（環境庁 1990）であり、西浦（霞ヶ浦）、外浪逆浦とともに霞ヶ浦水域を形成している。水原地区の湖岸は、コンクリートで護岸されているが、水際の一部にヨシ原が残っている。湖岸では、毎年冬になると（11月から3月まで）コブハクチョウを対象に餌付けが行われ、この餌を求めてホシハジロ、キンクロハジロなどのカモ類やユリカモメが集まる。同様に 100羽以上のオオバンも餌付けされている。

調査方法

オオバンの捕獲は、1994年12月12日から1995年3月13日まで（以下第1シーズンと呼ぶ）と1995年12月29日から1996年3月2日まで（以下第2シーズンと呼ぶ）の2シーズンにわたり行った（捕獲許可：平成6年環自野許第394号および平成7年環自野許第478号）。捕獲には投網と箱わなを併用した。箱わなには、ハト小屋用のスイングワイヤートラップを入口に付け、食パンでオオバンを誘引した。

捕獲したオオバンには、右翼に赤色ビニール製のウイングタグ（図2）を装着するとともに、原則として右脚に環境庁標識調査用の金属足輪を装着して放鳥した。ウイングタグの重量は、タグ本体と止め金具用ハトメを合わせ約1.4gである。ウイングタグは、タグの帯状の部分をお

¹ 〒270-1145 千葉県我孫子市高野山 234-3 我孫子市鳥の博物館

² 〒310-0911 茨城県水戸市見和 2-194-19

³ 〒289-2604 千葉県海上郡海上町高生 948-6

⁴ 〒311-2404 茨城県行方郡潮来町水原 448

オバンの上腕部に巻き付け、端をハトメで止めた(図3)。タグは上腕部の肩羽よりも内側に巻き、巻き付けたタグの輪に鉛筆一本入るくらいの余裕を持たせて固定した。

放鳥後、標識付きのオオバンの発見・観察を呼びかけ、その情報を収集し、移動の状況を把握した。

調査結果

第1シーズンには19羽、第2シーズンには20

羽、合計39羽のオオバンを捕獲し、標識して放鳥した。

標識鳥について、10地点28件の発見情報が寄せられた(図4)。このうち2地点2件は、死体で回収され、足輪が確認された(前出、山階鳥類研究所1996)。

発見情報は、1995年は、3月、4月、5月、6月、9月、10月の各月に、1996年は、4月、5月、7月であった。また、1996年の11月6日には、放鳥地の北浦で再び標識付きのオオバンが確認

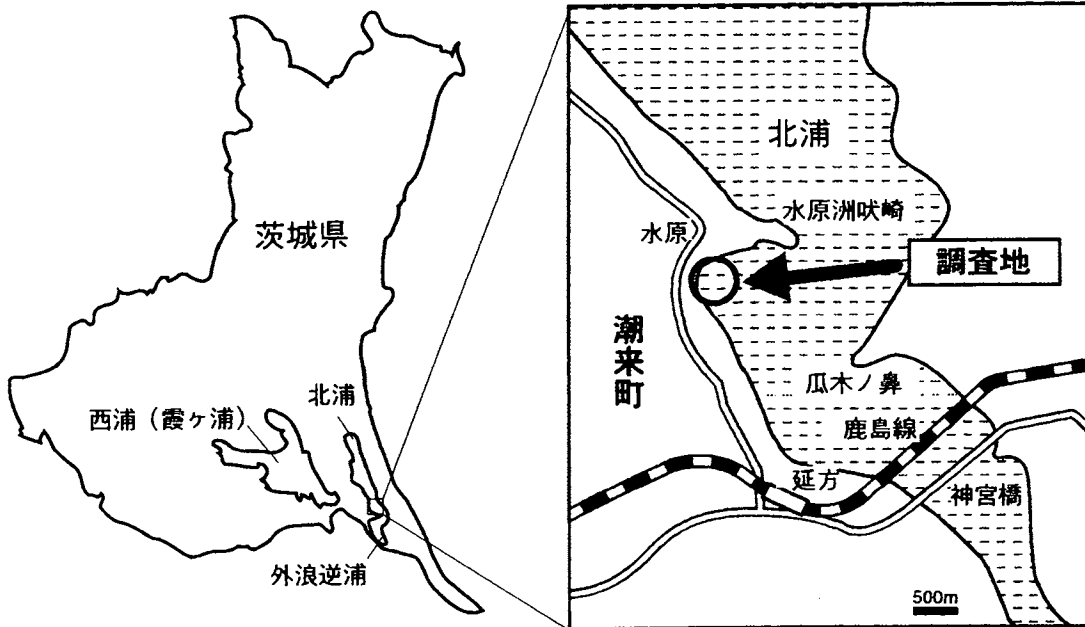


図1 調査地

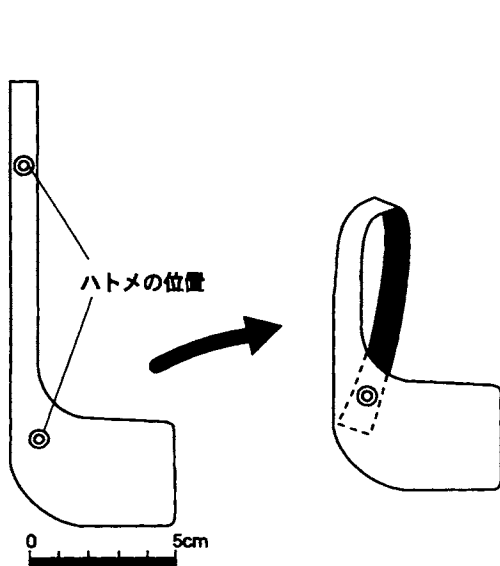


図2 ウイングタグの仕様

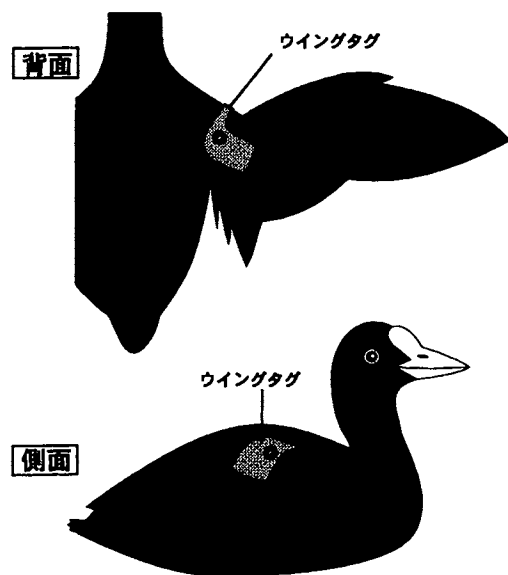


図3 ウイングタグの装着方法

された。

発見場所は、放鳥地から100km以上北上した7地点と放鳥地から100km以内で発見された3地点であった。

100km以上北上した7地点の中で、日本海側での発見は、青森県西津軽郡森田村狄ヶ館の溜池の1地点のみであった。他は全て太平洋側で、北から順に青森県上北郡の小川原湖、岩手県盛岡市の北上川、宮城県伊豆沼・内沼、宮城県亘理郡の牛橋川であった。

100km以内の3地点のうち、2地点は放鳥地から北西の方角、1地点は南西の方角であった。北西の方角の2地点は、栃木県真岡市の鬼怒川沿いの池と茨城県新治郡出島村の西浦（霞ヶ浦）沿いのハス田であった。南西の方角の1地点は、千葉県東葛飾郡の手賀沼であった。

発見情報の中で放鳥地より最も遠い場所は、放鳥地より約546km北方の青森県上北郡六ヶ所村中志（小川原湖北岸）、もっとも近い場所は、放鳥地より約26km北西の茨城県新治郡の西浦（霞ヶ浦）沿いのハス田であった。

考 察

調査の結果から、北浦で越冬するオオバンの一部は、約546km離れた本州北端まで移動することが確認できた。

また、北浦で12月から3月に標識したオオバンが、3月から10月の間に千葉県、茨城県、栃木県、宮城県、岩手県、青森県で確認されたことから、関東平野で越冬するオオバンの一部は、おもに太平洋側の関東以北の本州各地で繁殖し、「渡り」をしているものと考えられる。

しかし、1例ではあるが、9月に日本海側の青森県西津軽郡森田村狄ヶ館で9月に標識付きのオオバンが発見されたことから、日本海側で繁殖時期を過ごす個体もいることが示唆された。

また、標識したオオバンが、3月から9月までの時期に、青森県、岩手県、宮城県、栃木県、茨城県、千葉県とかなり広い範囲で再発見されていること、またオオバンの本州での繁殖時期が3月から9月までであること（Brazil 1991）から、北浦水原地区のオオバン越冬個体群は、同一地域の繁殖集団ではなく、各地の繁殖個体

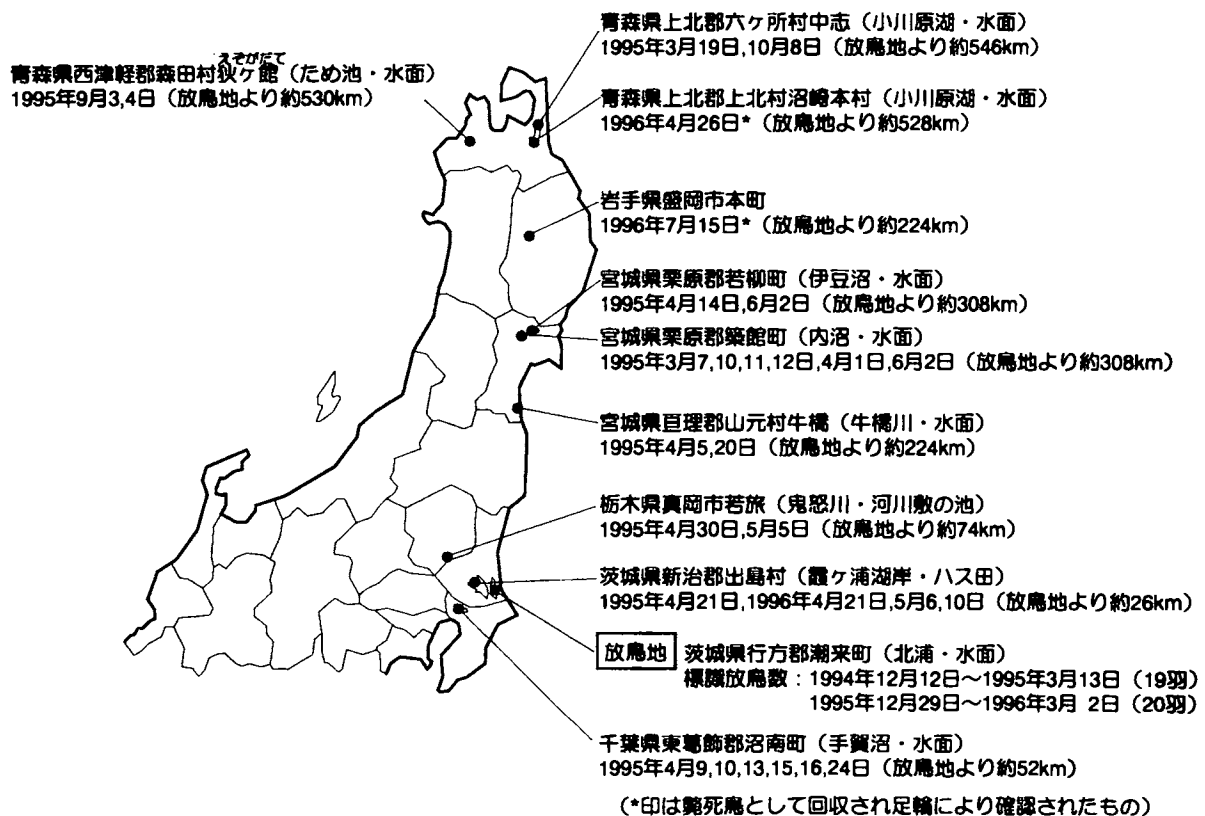


図4 標識付きオオバンの発見地点

群が集まって構成されているものと考えられる。

北海道で繁殖するオオバンは、12月から翌年の2月まで見られない(橋本1994)ことから、この時期越冬のため本州以南へ南下していると考えられるが、今回北浦で標識した個体は、北海道では発見されなかった。確かに広大な原野の中に点在する北海道の湖沼で標識付きのオオバンを発見するのは難しい。しかしながら、「同種の個体群間では、より北方で繁殖する個体群は、定住性の個体群の生息地を飛び越え南下し越冬する(Leap-frog Migration)」(Campbell 1985)傾向があることが知られている。関東より南の地域ではオオバンが少数の記録を除けばおもに冬鳥として知られている(Brazil 1991)ことから、北浦で越冬するオオバンの繁殖地は青森県までであり、北海道で繁殖するオオバンは、関東平野よりも南方で越冬していることが予想される。

謝 辞

本調査をまとめるにあたり、青森県の安藤一次氏、大坂知子氏、佐藤裕扇氏、三戸貞夫氏、宮城県の高田哲郎氏、笠原啓一氏、上村佐知子氏、佐場野裕氏、山元町歴史民俗博物館、栃木県の前田武四郎氏、益子勇氏、千葉県の上巻実氏、飯泉仁氏、飯泉久美子氏、平岡考氏、東京都の鈴木幸治氏の方々から標識したオオバンの発見情報を提供していただいた。青森県の宮彰男氏、岩手県の高田正吉氏、岩手県鳥獣保護センター、岩手県自然保護課の諸氏には、斃死した標識付きのオオバンの情報を提供していただいた。

また、山階鳥類研究所標識室の佐藤文男氏には、ウイングタグの材質や装着方法について、同研究室の三田村あまね氏には、斃死したオオバンの足輪の回収情報を教えていただいた。釧路市立博物館の橋本正雄氏には、北海道におけるオオバンの生息状況に関する情報をご教示いただいた。宮城県伊豆沼・内沼環境保全財団の高田哲郎氏には、標識オオバンの発見情報のほか伊豆沼、内沼におけるオオバンの生息状況について貴重な情報を提供いただいた。調査にあたっては、茨城大学理学部附属潮来臨湖実験所の施設を使わせていただいた。

さらに、日本白鳥の会、雁を守る会の呉地正行氏、同会宮林泰彦氏、文一総合出版バーダー編集部、日本鳥類標識協会の諸氏には、標識付きのオオバンの確認情報を呼びかける時に協力していただいた。

以上の方々に深く感謝いたします。

要 約

北浦(茨城県)で越冬するオオバン39羽を捕獲し、ウイングタグで標識し、放鳥した。その結果、青森県から千葉県までの地域10地点から、標識付きオオバンの確認情報が集まった。

関東平野で越冬するオオバンの一部は、繁殖期に東北北部まで渡っていることが確認された。

引用文献

- 青森県. 1973. 昭和47年度むつ小川原地区自然環境調査報告書. 青森県.
- Brazil, M. A. 1991. The birds of Japan. Christopher Helm, London.
- Campbell, B. & Lack, E. 1985. A Dictionary of Birds. T&AD Poyser, Calton.
- 橋本 正雄. 1994. 北海道東部、釧路市春採湖の鳥類. 釧路市博物館紀要(18):33-44.
- 福田道雄. クイナ科の分類. 世界の動物分類と飼育 10(2) ツル目. pp45-86. 東京動物園協会, 東京.
- 環境庁. 1990. 日本の湖沼環境. 大蔵省印刷局, 東京.
- 環境庁. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 環境庁, 東京.
- 小清水町教育委員会. 1985. 小清水町の自然. 小清水町教育委員会.
- 日本鳥学会. 1975. 日本鳥類目録. 学習研究社, 東京.
- 斉藤安行. 1992. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告 1:61-73.
- 新浜倶楽部. 1988. 新浜の鳥. 新浜倶楽部, 東京.
- 山階鳥類研究所. 1993. 平成5年度鳥類標識調査報告書. 山階鳥類研究所, 千葉.
- 山階鳥類研究所. 1996. 平成8年度鳥類標識調査報告書. 山階鳥類研究所, 千葉.

Movements of wing-tagged Coots (*Fulica atra*) wintering at Lake Kitaura

Yasuyuki Saito¹, Hisabumi Kikuchi², Syunzo Shimada³ & Yasuichi Yatagawa⁴

Summary

The Coot (*Fulica atra*) which breed in Hokkaido and northern Honsyu are supposed to migrate to southward in winter, but there have not been any recovery records by bird banding.

From 12th December 1994 to 13th March 1995 and from 29th December 1995 to 2nd March 1996, we captured 39 individuals of Coot wintering at Lake Kitaura (35° 58' 30" N, 140° 35' E) and fitted them with red wing-tags on right shoulder. Then we gathered the sighting informations of wing-tagged Coots.

Consequently, we could get the informations of 10 localities from Aomori, Iwate, Miyagi, Tochigi, Ibaraki, and Chiba pref. in breeding season. The longest way of movement was 546km north from the study area, and most sighting records located along the Pacific Ocean side of northern Honsyu.

KEY WORDS : Coot, migration, wing tag, Lake Kitaura

1. Abiko City Museum of Birds, 234-3 Kohnoyama, Abiko, Chiba 270-1145, Japan.

3. 2-194-19 Miwa, Mito, Ibaraki 310-0911, Japan.

4. 948-6 Takaoi, Unakami-machi, Kaijoh, Ibaraki 311-2404, Japan.

5. 448 Mizuhara, Itako-machi, Namegata, Ibaraki 311-2404, Japan.